

子どもの健康と環境を分析

# エコチル調査15年に

## 産業医大「維持が課題」

環境省の「子どもの健康と環境に関する全国調査」が開始から15年を迎えた。環境中の化学物質などが胎児から成長期以降の心身にどう影響するかを長期にわたり調べるプロジェクト。北九州・京築地区では八幡西区の産業医科大が調査を担っており、2835人(3月末現在)の子どもたちがボランティアで協力している。



エコチル調査の参加者を対象に産業医科大が開いた交流イベント(同大提供)

プロジェクトの通称は、エコロジー(環境)とチルドレン(子どもたち)を掛け合わせた「エコチル調査」。子どもに目立つぜんそくやアトピー性皮膚炎、肥満などと、環境の有害物や生活習慣などの関係性を調べるのが目的だ。2011年に始まり、全国15地区の約10万組の親子が参加。県内では福岡市の九州大と産業医科大が実務に当たる。

調査は妊娠中の母親に健康状態などを尋ねるアンケートに始まり、子どもの出生後は身長や体重などの測定、提供を受けた血液や尿の生体試料などの分析を行っている。得られたデータは食品や日用品の安全基準、健康に関するガイドラインや政策を策定する根拠とされている。

北九州圏は当初、約3千

組の親子の協力でスタートしたが、現在の参加率は94・5%。対象者が13歳となるタイミングで、調査の主な回答者が親から本人に切り替わったこともあり、参加の継続が課題という。

同大は3月、学内ホールで親子約80組(約300人)を集めた交流イベントを実施。中高生に人気があるタレントを招き、クイズ形式で健康や疫学調査を楽しく学んだ。

調査は対象者が40歳を超える54年ごろまで続く。同大サブユニットセンターの辻真弓教授(衛生学)は「協力してくれている子どもたちは中学生になる年齢にさしかかっている。自身の意志で調査に携わってもらえるよう、積極的に取り組んでいく」と話している。

(座親伸吾)

(掲載について西日本新聞社許諾済、無断転載(コピー、スマートフォン等での撮影)禁止)